

Emergency



Watch

No.56 Aug. 2015



神戸こども初期急病センター

2015年7月受診者数：2227人

【訴え】

1. 発熱 : 1337人 (962人)
2. 咳嗽 : 637人 (147人)
3. 嘔吐 : 455人 (203人)
4. 鼻汁 : 442人 (12人)
5. 発疹 : 381人 (257人)

(カッコ内は、その症状を主な訴えとして来院した患者数)

【疾患頻度】

1. 急性上気道炎・咽頭炎 : 672人
2. 感染性胃腸炎 : 353人
3. 手足口病 : 157人
4. 気管支喘息・喘息性気管支炎 : 126人
5. 感冒 : 104人

神戸こども初期急病センターの7月の総受診者は2227人でした。猛暑日が続く、プールなど、野外で遊んだ帰りに熱中症の症状が出て受診される方などが目立ってきています。小さいお子さんなどは体温調節が未熟ですから、水分や電解質の補給など、御家族の方の注意深い配慮が必要です。熱中症は予防できる病気ですので十分気をつけましょう。

今回は「デング熱」の話題を提供いたします。昨年は秋頃に70年ぶりに日本での流行が確認されました。戦争で兵士が持ち帰ったとされる過去の流行では広島・神戸などで20万人が感染・発症したそうです。近年はデングウイルスをもつ蚊にさされた旅行者が帰国後にウイルスが体内で増殖し、日本にも生息するヒトスジシマカが吸血することにより媒介され、海外渡航歴のない方がその蚊に刺されて発症する、という事例が多いようです。昨年は冬でいったん終息しましたが、今年も再度流行するかもしれないといわれています。

デング熱は感染しても無症状の人が70～80%とされています。しかし、2回目の感染で重症化することが言われています。1週間で自然に軽快するけれども高熱の続く「デング熱」と、より重症で予後の悪い「デング出血熱」や「デングショック症候群」には注意が必要です。デングウイルスに感染してからヒトが症状を発症するまでの潜伏期間は3～7日とされます。ウイルスに感染した蚊は一生感染力があります。デング熱の症状は39度以上の高熱の持続に加え頭痛・筋肉痛・関節痛や目の痛み、消化器症状、特徴的な皮膚の発疹（はしかのような発疹・図1・2参照）などがあります。特にアスピリンという薬を内服すると血が止まりにくくなり危険です。重い合併症にはショックがありデングショックといわれ、血がとまらなくなり命にかかわる場合があります。特に妊婦さんでは非常に重症化する場合があり病院への受診が必要です。治療法はなく、ワクチンもまだありません。診断は日本において検査キットによる診断が2015年6月から保険適用で可能となりました。蚊はどこにでもいますが、やはりリスクを減らすために、蚊にさされにくい服装や、蚊よけのシールを貼るほどの対策が必要でしょう。原因不明の発疹や発熱があり、蚊に沢山刺された既往がある場合は受診して相談しましょう。

図1：特徴的な発疹



図2 特徴的な発疹

